

入選

小学5年生の夏の親切

千葉県 専修大学松戸中学校
2年 中根直輝

僕が小学5年生のとき、夏休みが始まった7月下旬に、友達6人とランニングを習慣づけようと1週間に2回、家からけっこう遠い利根川の河川敷まで走ることを決めました。初日は、休けいを多めに取ったりして、利根川の河川敷までたどりつくことができました。

8月入ってから1回目のランニングをしていると、友達に熱中症の初期しょう症が出たので木陰で休むことにしましたが、飲み物と冷ます物がなくて困りました。すぐ前に自動販売機があるけれど、財布を持っていないし、引き返すにしろ、友達の家もこの木陰からけっこう距離があるので、どうしようかなと話合っていると、自転車に乗ったおばあさんが、

「その子、具合悪いの？大丈夫かしら？」

と聞いてくれたので、事情を話すと、そのおばあさんは家が近かったので、冷やせる物と僕たちの分まで飲み物をくれました。

僕たちが感謝を伝えると、おばあさんは自転車に乗って手をふって帰りました。その日は利根川に行かず、具合が悪くなった子の親が車で迎えに来て、僕たちは「なぜ、飲み物を持っていないのか？」と説教を受けました。

確かに、ランニングするときは飲み物を持っていくのは常識で、さらに気温も高いのでランニングを始める前に、確認をするべきだったなと思いました。

それから数日たった日、具合が悪くなった子からLINEが来て、その内容は「おばあさんに助けてもらったお礼に菓子を渡したい」とのことでした。その子だけでなく、僕たち全員飲み物をもらったので、話し合いの末、みんなでせんべいを渡そうということになりました。

とりあえず次の日に、みんな飲み物をしっかり持ってその木陰まで行き、おばあさんが帰っていた方向をたどると、角の家で庭に水をまいているおばあさんがいたので、みんなで感謝の言葉を伝え、せんべいを渡して帰りました。

今回のことで、飲み物を持ったり、走る時間帯を考えたりするなど、準備が足りなかったという反省点多々ありましたが、いろいろと考えさせられる面もありました。何より、まったく知らなかったおばあさんの優しさ親切さに触れ、心が温かくなりました。

コロナウイルスが流行してから、人と人がふれ合うことが難しくなっていたこともあり、おばあさんの心配りがより深く感じられた気がします。自分だったら、困っている人に声をかけてあげることができただろうか、見て見ぬふりをしなかったらどうか。おばあさんにしっかりと感謝の気持ちを伝えられたことは良かったです。

今後は、もし困っている人を見かけたら、解決をしてあげることができないかもしれないけれど、「大丈夫ですか？お手伝いできることはありますか」と声をかけて、歩み寄れる人になりたいです。